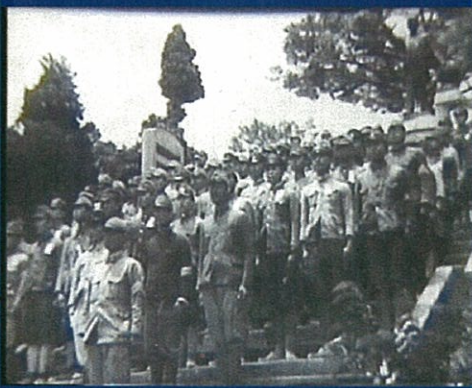


平成 21 年度 沖縄県公文書館映写会

映画にみる沖縄の戦前・戦後



映像を読み解く

解説 ; 世良利和 (沖縄映画研究者)

コメンテーター ; 山里将人・仲松昌次・名嘉山リサ

日時 ; 平成 21 年 9 月 4 日 (金)

午後 2 : 00 ~ 5 : 00

場所 ; 沖縄県公文書館講堂

問合せ ; 098-888-3875

入場
無料

申込
不要

<http://www.archives.pref.okinawa.jp/>

沖縄の映画史をたどる

世良利和

今回の講演では以下の2点を中心に取り上げる。

- ・ 沖縄は独自の映画史を持っている
- ・ 記録映画だけが映像資料ではない

1 映画の伝来

1896（明治29）年11月、一人ずつ暗箱を覗くエジソンのキネトスコープが神戸で公開された。これが日本で最初の映画上映とされる。翌1897年2月にはシネマトグラフとヴァイタスコープが相次いで輸入され、現在と同じスクリーン映写方式が始まる。

沖縄では1902（明治35）年3月、東洋活動写真会が那覇の辻端道で興行したのが最初だ。常設館ができるのは1913（大正2）年のことで、芝居小屋の香霞座が改装してパリー館となった。翌1914（大正3）年には専門館として帝国館が新築された。

2 沖縄での映画制作

沖縄で初めての映画撮影は、1910年代の終わり頃と考えられる。沖縄芝居の一座が、首里城附近の映像を連鎖劇に使った。1920年代に入ると複数の劇団が沖縄モノの連鎖劇を撮る。そして1930年代には、那覇でロケした現代劇「執念の毒蛇」と中城城でロケした時代劇「護佐丸誠忠録」という、2本の本格的な無声映画が作られる。また連鎖劇では義賊が活躍する「運玉ギルウ」、妖僧の怪異譚「悟道院変化」、慶長の役を描く「国難」、歌劇「薬師堂」などが撮影されている。

これらは単に「地方ロケが行われた」のではなく、「沖縄の人による、沖縄を題材にした、沖縄の観客のための映画」という特色がある。こうした沖縄での映画製作とその受容については、これまで日本映画史も沖縄文化史もほとんど取り上げてこなかった。

日本の映画史は、現代劇の東京と時代劇の京都を中心に記述されていて、大半は「地域映画史」という視点を欠いている。しかし世界の映画史がハリウッド中心の視点だけではとらえきれず、各国、各民族、各言語による多様な視点が必要なように、日本の映画史も各地域それぞれの製作や受容に目を向ける必要がある。特に沖縄では独自の歴史と風土に根差した映画が、沖縄芝居を土壌として90年前から作られていたのだ。

3 劇映画の資料価値

1930年代の「護佐丸誠忠録」には、製作者でもある主演の平良良勝を始め、沖縄芝居の名優が総出演している。演劇史の資料としても、当時の沖縄の風景を伝える資料としても貴重だ。戦前に沖縄の人が製作した映画で、現存するのはこの「護佐丸誠忠録」と「執念の毒蛇」だけだ。どちらも記録映画ではなく、劇映画だ。

一般に記録映画やドキュメンタリーは事実をありのままに撮っている、という先入観がある。これに対して劇映画は作り事で、資料的価値が乏しいと考えられているが、果たしてそうだろうか？

ドキュメンタリーにも「脚本」や「演出」は存在する。編集によって順序を入れ替えるだけで、映像の印象はガラリと変わってしまう。またナレーションや字幕を使えば、映像はいくらでも観る者を欺く。

これは決して戦前の国策映画やナチスのプロパガンダ映画に限った話ではない。ドキュメンタリー映画の元祖とされるロバート・フラハティ監督の作品も演出されている。さらにはあえて何かを撮らないという、消極的な操作によって事実を覆い隠すこともできる。結局カメラがとらえるのは、無数の現実のごく一部でしかない。

ドキュメンタリーの真実は、目に見える映像や聞こえる音声そのものではなく、むしろ撮る側と撮られる対象の間に存在しているのではないか。そしてそれをどう読み解くかは、いつも観る側に委ねられている。これは劇映画も同じだ。「客観的な記録性」という線引きで、劇映画を映像資料の収集対象からははずすという考えには賛同できない。

劇映画のテーマ、作品解釈の変遷、観客の反応などは、文化史や歴史意識を探る上で大切な資料だ。沖縄は映像の宝庫であり、一般に知られていない劇映画も数多くある。デジタル化が進む現在、フィルムやビデオでしか入手できない作品を可能な限り収集し、保存する方策が必要ではないか。

4 外部からのまなざし

沖縄独自の映画製作は、日本の戦時体制が強化された 1930 年代の半ばに、いったん途絶える。その一方で本土の映画会社が沖縄を劇映画の舞台に選び、さらには沖縄の風土風俗を描く文化映画も次々に制作された。劇映画では「敵艦見ゆ」、「オヤケアカハチ」、「白い壁画」があり、いずれも舞台は宮古・八重山だ。文化映画では日本民芸協会の「琉球の民芸」や「琉球の風物」がよく知られている。またこの時期には、沖縄を南進日本の拠点と位置づける国策的作品も作られた。

これに対して、沖縄戦の映像は沖縄や日本側にはなく、米軍側によって大量に撮影され、保存された。この映像量の圧倒的な差は、そのまま沖縄戦の情勢を象徴している。米軍が残した映像の中には、「白旗の少女」も含まれていた。沖縄では大きな反響を呼んだが、後に日本兵が後ろにいたのは偶然とわかる。先入観が「事実」を誤認させたのだが、しかし「事実」かどうかと言うこと以上に、なぜそう見えてしまうのかという「背景」を考えることの方が重要だ。

戦後の占領下では、米軍関連機関による広報ニュース、占領政策や移民促進の宣伝映画などが製作された。本土からの民俗学的なまなざしや南進政策の声高なプロパガンダは、1945 年 6 月の沖縄戦終結を軸にして、今度は米軍の統治政策のプロパガンダ映画へと折り返されている。

5 占領下の映画状況

戦後の沖縄では、米軍による保護を受けた沖縄芝居が黄金時代を迎える。その背景には沖縄文化の独自性を打ち出し、本土との違いを明確にしたい米側の思惑もあった。映画の巡回上映では、当初は密輸フィルムが出回った。やがて常設館ができ、本土からの正式輸入が始まると、芝居人気は衰える。劇団では挽回策として戦前のように映画や連鎖劇を撮るが、そのきっかけは 1951 年の「護佐丸誠忠録」リバイバル上映ではないか。

この時期に沖縄で作られた映画については、組織的な調査が行われておらず、全体像ははっきりしない。これらを放置したまま沖縄映画とその歴史を論じるわけにはいかない。また 1950 年代には本土で「ひめゆりの塔」などの沖縄戦映画や琉球を描く時代劇、あるいは唐手映画などが製作され、戦後最初の沖縄映画ブームを迎える。だがこの時期に沖縄では広大な米軍基地の建設が進められ、本土の建設業界が「沖縄ブーム」に沸いていたことを見落としてはならない。

6 本土化の波

戦後の沖縄での映画製作は、戦前と同じく劇団主体の小資本や個人資金によるもので、本土の大資本が製作・配給する娯楽大作には太刀打ちできなかった。本土の映画会社は、松竹のカラー大作「海流」を皮切りに、本格的な沖縄ロケに進出する。その「海流」と同時期に、沖縄では「青い珊瑚樹」という映画が撮られた。これは船越義彰の新聞小説が原作で、RBCの人気ラジオドラマを映画化したものだ。しかしモノクロのスタンダードでは時流に合わず、公開直後にお蔵入りとなった。

「青い珊瑚樹」には、本土作品の「海流」とはひと味違う風景が撮られている。当時の様子を伝える貴重な映像であると同時に、人々の目線や意識を知るための資料でもある。続く 1960 年代には沖縄でもテレビ放送が本格化し、今度は映画産業が大打撃を受ける。そして劇団に依拠した沖縄での映画製作が衰退するが、そうした中で金城哲夫の監督・制作による「吉屋チルー物語」が最後の輝きを放った。

1960 年代半ばになると、沖縄での映画製作は本土化の波に呑み込まれ、再び途絶える。その一方で米軍統治への反発、祖国復帰運動、沖縄の現状などを描くドキュメンタリー作品が登場し始め、やがて 1972 年の本土復帰を迎える。

以上、駆け足で戦前から戦後にかけての沖縄映画の歴史をたどった。

本土の映画に描かれた沖縄のイメージに関しては、これまでも様々な発言や論考がなされているが、足元に眠る沖縄独自の映画史は、まだ十分には掘り起こされていない。劇映画の収集保存とともに、今後の課題ではないか。

①沖縄映画史年表			
年代	項目		
1902(明治35)	那覇・辻端道で、沖縄初の活動写真興行が大盛況		
1913(大正2)	芝居小屋を改装した香霞座パリー館が、初の活動写真常設館として営業		
1914(大正3)	帝国館が映画専門館として新築開業		
1916(大正5)	沖縄に初の連鎖劇導入(フィルムは本土から供給)		
1910年代末	沖縄モノの連鎖劇撮影か		
1920年代初め	球陽座、新生劇団などが沖縄独モノの連鎖劇撮影か		
1930年代	本土で沖縄映画ブーム、沖縄では珊瑚座が連鎖劇制作		
1932(昭和7)	沖縄にトーキー設備導入 沖縄制作「執念の毒蛇」那覇ほかでロケ		
1934(昭和9)	沖縄制作「護佐丸誠忠録」が中城城ほかでロケ 本土制作「敵艦見ゆ」(沖縄ロケなし)		
1937(昭和12)	本土制作「オヤカエ・アカハチ」(本島ロケ)		
1941(昭和16)	本土制作「白い壁画」(本島ロケ) 国策映画「海の民 沖縄島物語」(本島ロケ)		
沖縄戦	米軍による大量の記録フィルム撮影		
1950年代	米軍による広報宣伝映画制作 本土で沖縄映画ブーム		
1951(昭和26)	日本映画の正式輸入開始 「護佐丸誠忠録」リバイバル上映		
1952(昭和27)	戦後初の沖縄制作「野盗の群れ」(真喜志康忠主演)		
1953(昭和28)	本土制作「ひめゆりの塔」(沖縄ロケなし)大ヒット		
1950年代後半	沖縄芝居の劇団による16mm映画制作や連鎖劇が復活		
1958(昭和33)	乙姫劇団が「月城物語」と「山原街道」を制作		
1959(昭和34)	本土制作「海流」が戦後初の沖縄本格ロケ 沖縄制作「青い珊瑚樹」 沖縄にテレビ開局		
1960(昭和35)	沖縄制作「仲直り三良小」		
1961(昭和36)	沖縄制作「吉屋チルー物語」		
1960年代後半	沖縄を描く本土のドキュメンタリーや沖縄ロケ作品が増え、沖縄制作の劇映画衰退		
1966(昭和41)	本土制作「網走番外地」(本島ロケ)		
1968(昭和43)	本土制作「神々の深き欲望」(石垣、大東ロケ) 本土制作「東シナ海」(本島ロケ)		
1969(昭和44)	本土制作ドキュメンタリー「沖縄列島」		
(作成:世良利和)			

②戦前に沖縄で制作された主な劇映画		種類	出演		映像保存
1918-19年	タイトル不明(首里城附近の情景あり?)	連鎖劇	?渡嘉敷守礼一派		
1922-23年	松の精	?連鎖劇	球陽座		
?1923年	渦	連鎖劇	?新生劇団系		
?1923年	沖縄入り	連鎖劇	?球陽座		
?1923年?34年	薬師堂	連鎖劇	?新生劇団		
?1931年	運玉ギルウ	連鎖劇	?珊瑚座		
1932年	沖縄県の名所古蹟の実況	記録映画			
1932年	執念の毒蛇	劇映画	渡口政之助ほか		○
?1934年?35年	護佐丸誠忠録	劇映画	平良良勝ほか		○
1935年	琉球史劇 国難	連鎖劇	珊瑚座		
?1935年?36年	悟道院変化	連鎖劇	珊瑚座		
③1930-40年代に制作された本土の主な沖縄関連映画		種類	備考		
1931年	南の島 琉球	文化映画		無声	○
1932年	琉球	記録映画		無声	
1932年	琉球の旅	記録映画		無声	
1934年	敵艦見ゆ	劇映画		無声	
1935年	琉球雑観	文化映画		無声	
1936年	琉球古典舞踊	文化映画		発声	○
1936年	文化映画 沖縄	文化映画		発声	○
1937年	オヤケアカハチ 南海の風雲児	劇映画		発声	
1937年	沖縄	文化映画		発声	
1939年	童宮の幻想	観光映画		発声	
1939年	琉球の民芸	文化映画		発声	○
1939年	蛇皮線の国	文化映画		発声	
1939年	琉球舞踊	文化映画		無声	
1940年	琉球の風物	文化映画		発声	○
1941年	白い壁画	劇映画		発声	○
1941-42年	海の民 沖縄島物語	セミドキュメンタリー		発声	○
④戦後の米軍政下の沖縄で制作された主な劇映画		監督・演出	出演		
1952年	野盗の群れ(按司と盗賊)	伊集田実	ときわ座ほか		
1954-56年	新説・運玉義留	宮平雅風	ともえ劇団系ほか		○
1956年	黒金座主	翁長小次郎	翁長一座		
1956年	朝丸夕丸	大宜見小太郎	大伸座		
1956年	武士松茂良	儀保哲也	みつわ座		○
1956-57年	大動乱	石川文一	ゆたか座・演技座・真楽座ほか		
1958年	敢闘	山城茂	大伸座		
1958年	月城物語	大日方伝	乙姫劇団	カラー	○
1958年	山原街道	大日方伝	乙姫劇団	カラー	○
1959年	青い珊瑚樹	山城茂	高安六郎ほか		○
1960年	仲直り三良小	古波蔵東清	翁長一座	カラー	○
不明	決戦・伊江島沖	?山城茂	高安六郎一座		
不明	?伊江島ハドロー小	古波蔵東清	不明	カラー	
不明	?ハドロー小物語	?山城茂	高安六郎一座ほか		
不明	?新作ハドロー小	?石川文一			
1961年	吉屋チルー物語	金城哲夫	清村悦子ほか		○
1966年	移民の父 当山久三伝	山城茂	島正太郎ほか	カラー	
1966年	太陽は俺のものだ	西条文喜	真喜志康忠ほか	カラー	
(作成:世良利和)					

講師及びコメンテーター略歴

(1)世良利和（せら としかず 沖縄映画史研究者）

1957年島根県出身。岡山大学大学院修士課程修了。専攻はドイツ語圏文学と映画。著書『沖縄映画大全』（ボーダーインク、2008年）

(2)山里将人（やまざと まさと 沖縄映画史研究者）

1934年那覇市泊生まれ。1963年昭和医科大卒。戦後沖縄映画界の生き字引。山里外科病院院長 著書『アンヤタサ！沖縄・戦後の映画 1945～1955』（ニライ社、2001年）

(3)仲松昌次（なまかつ まさじ 映像ディレクター）

1944年本部町出身。琉球大学法文学部史学科卒。1968年日本放送協会（NHK）入社 2005年NHKエデュケーショナル（統括プロデューサー）を退職。現在フリーディレクターとして活動。

(4)名嘉山リサ（なかやま りさ 映画研究者）

那覇市生まれ。琉球大学法文学部卒。コロンビア大学大学院卒。沖縄工業高等専門学校総合科学科講師。専門はアメリカ映画研究。主にアメリカの映画におけるマイノリティーの表象について研究。2007年に沖縄タイムス「唐獅子」に映画についてのコラムを執筆。